

遼金代燕京の禪宗

竺沙 雅章

私はかつて宋元文化の北流を明らかにするために、遼代から元代にいたる華北とくに燕京（今の北京）の仏教の系譜をたどったことがある。その際取り上げたのは慈恩宗（法相）と華嚴宗であって、禪宗には及ばなかった。それと
 いうのも、遼代には禪宗は振わなかったというのが通説であって、史料もきわめて少ない。金代については、禪宗ひ
 とり盛行したといわれるが、万松行秀以外に禪僧で知られたものはほとんどいない。そのため、私には考察の緒がつか
 めなかつたのである。ところが近年、北京の遼金史蹟の調査がすすみ、その報告書、梅寧華主編『北京遼金史迹図
 志』上下（北京燕山出版社、二〇〇三、四年、以下略称『図志』）が出版され、別に論文集『北京遼金文物研究』（同右、
 二〇〇五年）も刊行された。前者には、この時代の禪僧にかかわる仏塔や碑刻が多く掲載され、後者には禪僧を扱っ
 た論文も含まれている。またわが国では、古松崇志氏が論文のなかで、遼代にも禪宗が行われていたことを初めて指
 摘した^①。それら出版の資料と諸論文に刺激されて、私も遼金時代の燕京の禪宗について調べてみようと思つて執筆し
 たのが本稿である。粗雑なものだが、この論文によって、中国禪宗史の空白期がいささかでも埋めることができるな
 らば幸いである。なお、最も多く利用する碑刻資料の大部分は、『図志』と『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本滙編』（以
 下『北図』）とに拠つた。

一、唐代幽州の禪宗

遼代に入るまえに、それ以前の燕京の禪宗について概略述べておこう。北京地域の仏教は西晋に始まるといわれるが、禪宗とくに南宗禪がこの地域に伝来したのは、もちろん唐後半期である。北京は唐代には幽州と呼ばれた。記録に見える幽州最初の禪僧は、馬祖道一の法嗣盤山宝積（『祖堂集』卷十五、『景德伝灯録』卷七）である。盤山は幽州の東郊蘆州にあり、「京東第一山」と称せられた名勝の地である。宝積は出身地、俗姓、生卒年等はすべて未詳だが、馬祖の法嗣とすると、八世紀後半の人であろう。『祖堂集』によれば、平生の住持軌範は嚴整で尋常と異なり、その名は海内に聞こえたという。没後、凝寂大師、真際之塔を勅賜された。その法嗣には、狂僧として知られた普化がいる。後住の盤山和尚「幽州第二世住」（夾注）は、青原下第五世投子山大同の法嗣であり（『景德伝灯録』卷十五）、宝積とは法系を異にする。

九世紀になって盤山に住した僧に道宗（七九五〜八六六）、暁方（七九四〜八七〇）がいる。道宗には知宗「盤山上方道宗大師遺行碑」（『欽定盤山志』卷八）があつて、その行実を知ることができる。彼は俗姓田氏、千牛將軍資庭の子孫、元和九年（八一四）燕城の金閣寺（遼代の崇国寺）にて受戒、盤山宝積に参じたが、のちに永泰大師靈瑞（七六一〜八二九）のところに至つて嗣法した。靈瑞もまた馬祖の法嗣である。太和二年（八二八）郷里の盤山に帰つて峰頂に禅居し、権貴の招きにも応ずることなく、三十九年間山を下らず、咸通七年（八六六）に示寂した。その後を継いだのが常実で、道宗がいた宝積寺（のちの上方感化寺）に住して、伏虎禅師と称せられた（『欽定盤山志』卷八）。

暁方は蘇州常熟の人、五洩山靈默大師（七四七〜八一八）について落髮した。姓氏、行歴は未詳。盤山の甘泉山に茅庵を結び、咸通十一年（八七〇）に示寂した。郎肅「甘泉普濟禅院靈塔記」（『欽定盤山志』卷八）がある。靈默は「宋

高僧伝』卷十、『景德伝灯録』卷七等に伝があつて、彼は馬祖の法嗣であるから、暁方もその法系に属するのである。

このころには、臨済義玄（?～八六七）が現れて河北一帯に教化を及ぼし、幽州もその例外ではなかった。存獎（八三〇～八八八）は七歳で出家を志し、盤山甘泉院で暁方に依止したが、のちに臨済義玄の法を嗣いで、盤山には遂に帰らず、魏府（江西）の江西禪院において開法教化した（公乘億「魏州故禪大德獎公塔碑」、『文苑英華』卷八六八）。また前述の普化は宝積の法嗣だが、義玄とも交わりを結んだ。久しく盤山の黒塔峪で修禪した志閑も、義玄に参じている（『欽定盤山志』卷八）。『景德伝灯録』卷十二には、義玄の法嗣として幽州譚空和尚が見える。

以上のごとく、唐後半期の幽州では、東方の盤山が南宗禪の一つの拠点となつており、主に馬祖下の諸僧がここに住っていた。さらに九世紀後半になると、同じく馬祖下の臨済義玄の教化をうけた者が幽州で活躍した。

一方、幽州出身者で名を成した者となると、先ず雲居道膺（?～九〇二）が挙げられる。彼は俗姓王氏、幽州薊門玉田の人。幽州延壽寺で受具し、遊方して洞山良价に参じてその法を嗣ぎ、洪州（江西）雲居山を開いた（『祖堂集』卷八、『景德伝灯録』卷十七）。彼の後を継いで雲居山第二世となつた道簡も幽州范陽の人である（『景德伝灯録』卷二十）。幽州で活躍した禅僧の多くが南嶽下であるのに対して、幽州から出ていった者が青原下であるのは、興味深い事象である。

なお北京の西山、今の門頭溝区に仰山という山があり、五代後梁の開平四年（九一〇）には、ここに仰山院があつたという（『元一統志』卷一）。その山名から類推して、唐末に瀉仰宗が北伝し、その門徒が西山に仰山院を創建したとする説があるが、それは当たらない。仰山というのは、「冠として巖壑の上に出づる」（同右書）山容から名付けられたもので、仰山慧寂の山号とは無関係である。もつとも、慧寂伝（『景德伝灯録』卷十一）には、幽州から来た僧との問答が二ヶ所に出ているので、彼らが帰郷して仰山の宗風を幽州に伝えたことはあつたかもしれない。

二、遼初の禪僧——従実と智辛

九三六年、後晋石敬瑭によって、長城以南のいわゆる燕雲十六州が契丹（遼）に割譲され、幽州は遼の南京となり、また燕京と称されることになった。その直後に、曹洞宗の僧従実が湖南から燕京にやって来た。『元一統志』卷一、古跡、大万寿寺の条に、「古記」によって次のごとく記す。

燕京の西に古刹あり、城を距つこと百里、泉石最も幽なる処、名づけて檀栢たんぱくと曰う。師、諱は従実、湖南より来たる。乃ち曹洞二代の孫、遼太宗の会同年間（九三八〜九四七）に至れり。³

これによって、従実が曹洞宗の僧であり、彼が湖南からやって来たのは会同年間、燕京が遼の支配に入つて間もないころであつたことが分かる。実は、彼の名は南の宋側にも知られていた。『景德伝灯録』卷二十三、青原第七世、前潭州雲蓋山景和尚法嗣の「幽州潭栢水従実禪師」がそれである。ただし、機縁の語句のみで、行実は記されていない。『景德伝灯録』によってその法系を記せば、次のごとくである。

青原行思——石頭希遷——葉山惟儼——道吾円智——石霜慶諸——中雲蓋——雲蓋山景——潭栢水従実³

潭州は湖南の長沙であり、従実が湖南より来たというのに合う。また洞山は青原第四世、曹山は第五世なので、「曹洞二代孫」というやや曖昧な表現も、曹山より二世後とすればその世代も合致するので、「古記」は信ずるに足る史料ということができる。

従実の伝は『潭栢山岫雲寺志』（以下『寺志』）卷一にもあり、それには、

師は其の徒千人と、法を潭栢に講じ、宗風大いに振るう。後、華嚴祖堂にて示寂、塋を山中に建つ。餘姚謝遷の嘉福寺碑記に其の事を載す。⁶

と記す。謝遷(一四四九〜一五三二)は明代の政治家、文集に『帰田稿』八巻がある。従実が住した潭柘山は燕京の西山、今の北京市門頭溝区東南部にあり、寺は山名によって俗に潭柘寺という。諺に「先に潭柘あり、後に幽州あり」といわれた古刹で、晋代ここに華嚴禪師がいたと伝えるが、実際には彼は唐代の天宝年間に示寂した人であるらしい。『寺志』巻一「歴代法統」の晋華嚴禪師伝は「宋高僧伝」巻二十五「唐幽州華嚴和尚伝」の説話を引用しているが、同一人であるかどうかは分らない。ともあれ、謝遷の「碑記」によれば、従実がいた遼代にも、潭柘山に華嚴禪師の祖堂があったことになる。

ところで、前述したように、唐末の幽州では馬祖下、臨濟宗の諸僧が活躍し、曹洞宗のものは一人も見られず、遼初の従実が曹洞宗最初の僧であった。彼が湖南の潭州から、これまで縁のなかつたいわば処女地の燕京までやって来たのは、どういう縁によってであろうか。潭州と燕京とを結びつける存在は、幽州出身で江西の雲居山を開いた雲居道膺とその法嗣の雲居道簡である。唐末において、江西の曹洞と湖南の石霜とは非常に親密な関係にあったといわれ、事実、洞山法嗣の龍牙居遁(『祖堂集』巻八)、道膺法嗣の水西南台(同巻十一)はそれぞれ湖南の潭州に住していた。彼らを通じて、従実が燕京の情報を得ていたことは、十分にありうる。一つの可能性として挙げておこう。

『元一統志』の大万寿寺の条では右文につづけて、

世宗天祿の初(九四七)、開龍禪師智常ありて、潭柘の道を弘め、燕において此の寺を創る。⁽³⁾

とある。つまり開龍禪師智常なる僧が潭柘の道すなわち従実の宗風を弘めて、燕城にこの寺―大万寿寺の前身、寺名は不明―を創建して、西山から城内に進出したのである。その後、「景宗の保寧初(九六九)名を悟空と賜い、聖宗の統和十九年(二〇〇一)万寿禪院と改名、太平年間(二〇二一〜一〇三〇)太平寺と改名、道宗の太康中(二〇七五〜一〇八四)華嚴寺と改名(同右書つづき)し、金代になると、後述の希辯が一時ここに住し、皇統初(一一四二)寺名を賜わって大万寿寺となったのである。このように寺名の変更は記されているが、智常の後の法系は明らかでない。

い。遼代後期は衰微したとみられる。

従実と同じころ、盤山には智辛がいた。彼には、張明「盤山上方感化寺辛禪師舍利塔記」応曆二年九五二建立（北
 図】四五—四、『全遼文』卷四等）がある。それによると、彼は俗姓王氏、金台三河（薊県）の人。年十五にして感
 化寺降龍禪師の門人徹禪師について落髮、乾寧元年（八九四）本寺において具足戒を受け、安居ののち諸方を遊歴し
 て、「真侶を江南に訪い、名山を湖外に礼」した。湖外は湖南のこと。¹⁰「六祖の衣」すなわち南宗禪を修め、故山の盤
 山に帰って法席を重開せんとしたが、「達人」から都邑に居ることを請われて、燕京城内の崇国寺に寓居した。崇国
 寺が唐代の金閣寺であることは前に述べた。天祿五年（九五二）八月四日に坐化し、荼毗して燕城の北に葬り、翌
 曆二年十月、盤山上方感化寺の東谿に舍利塔を建立した。このように、遼代に入っても燕京と盤山の関係は密であつ
 た。智辛がどの法系に属するかは、分からない。

なお『欽定盤山志』卷八「方外」に遼代の僧として挙げるのは、非覺、非濁、等偉の三人である。いずれも律僧であつて、
 彼らにとつて盤山は、「脚疾治療のため」（非濁）であつたり、「宴息の所」（等偉）であつて、修禪の場所ではなかつ
 た。しかし、当時の盤山には、下に法堂仏宇が建ち、上に禪寶經龕がある禪律共存のところであつた。¹¹

三、遼代後期の燕京禪宗——菩薩戒壇と修禪の僧たち——

遼代仏教は聖宗、興宗、道宗の時に全盛期を迎え、帝室の帰依のもと、慈恩宗、華嚴宗さらには律宗、密宗が栄えて、
 多くの学僧を輩出し、諸種の章疏が著された。それらの教宗に圧倒されて、当時禪宗が振るわなかつたのは事実であ
 る。それを象徴するのは、聖宗が義学沙門詮曉（明）らに命じて経録を再定させた時、『六祖壇経』『宝林伝』等のみ
 な焚毀せしめて、その偽妄を除去したということである（『釈門正統』卷八）。とはいつても、そうした施策によつて

禪宗が全く行われなくなつたわけではなく、むしろ道宗朝には、律僧のなかで禪を修める者がいたことが、当時の碑刻によつて知られる。その一人が法均（一〇二一〜一〇七五）である。彼には「故壇主守司空大師道行之碑（額題）」¹²があつて、その事績を知ることができる。すでに前掲の古松崇志氏のすぐれた論文があるので、詳細はそれにゆずり、ここでは禪に関わることのみを述べることにする。碑文中に、

行は毗尼に在りと雖も、志は達磨を尚ぶ。因つて笈を負つて師を尋ね、衣を解かざること多歲。爲に堅木を攻め
 (?), 切に頭然を救い、以て名數相應するに至る。¹³

とある。法均は律を業とするが、志は達磨の禪を尚び、笈を負つて師を尋ね、幾年も專一に求道したという。「攻堅木」の出典は未詳だが、「救頭然」は「祖堂集」卷八、雲居道膺章に「勤求至道、如救頭然」と見えるのが最も早い用例のようであり、宋代以後よく使われる。

ところで法均はもともと教学の僧であり、「税金」「吼石」等の論を著し、後進を導くこと十数年に及んだ。清寧七年（一〇六一）朝命によつて諸家の疏抄の校定に従事したが、しばらくして辞任し、馬鞍山に隱棲。八年後、燕京管内の僧務を補佐しつつ、馬鞍山に初めて戒壇を開いて多数の士女に戒を授け、受戒を求める者は国外に及んだ。そのような経歴からみると、法均が「笈を負つて師を尋ねた」のは二十代、遅くとも三十歳前後、興宗朝のころであつたと考えられる。

遼代後期の禪宗状況を記すものに、新出の碑刻「大安山蓮花峪延福寺觀音堂記」¹⁴がある。碑文は碑陽三十二行、碑陰三十行、一行五十字前後の長文で、しかも文字の摩滅したところが多く、特に碑陰が甚だしい。この碑刻については包世軒、黄春和の論文¹⁵があり、前者には釈文を付しているが、自らも断つていのように十全なものではない。より精密な考証は後日に俟つこととし、ここではその梗概を述べるに止めたい。

碑記の前文七行は、遼代禪宗の由来を述べる。すなわち、仏陀の教えは天竺から東土に及び、永平の歳に摩騰が漢

に來たつて、三藏が初めて興り、普通年間に達磨が梁に來て、玄風創めて扇つた。これより禅と講とが隆興して、唐宋に伝わり、我が大遼に至つたが、代々教宗が盛んで、禅宗は隆盛でなかつた。ところが「康安一号」道宗の大康、大安年間（一〇七五〜一〇九四）に至つて、南宗の氣運がおこり、奇人がやつて來て大旨を唱えた。そこで寂照大師、通円、通理の三上人が現れて、仏の心印を伝え、累代の高風を継ぎ、玄風大いに扇うことになり、今（天慶五年一一一五ころ）になると、禅の俊秀は林のごとく輩出しだして教宗を圧倒するようになった。この三上人は「曹溪の嗣、法眼の玄孫」であり、この方の宗派の原、伝心の首なる者である、と記す。つまり、遼国の南宗禅は道宗朝の寂照、通円、通理三大師に始まり、今日の隆盛がもたらされたというのである。

ここで注目されるのは、三上人が「曹溪の嗣、法眼の玄孫」とする点である。包氏が曹溪を曹洞宗とするのは論外として、黄氏は法眼宗は北宋中期にすでに断絶しているので、遼代に法眼宗が燕京に入ることとは不可能であり、「眼」は「演」の別字であつて、この法眼は臨濟宗の五祖法演（?〜一一〇四）のことであるとす。しかし、法演の玄孫だとすると、金・南宋代となつて遅すぎる。わざわざ眼を演に改める必要はなく、やはりこの法眼は法眼宗とみるべきである。およそ、法眼宗は五代宋初に江南で栄えた宗派であつたが、『景德伝灯録』卷二十五によると、清凉文益の法嗣三十人中、七人もが華北出身者であり、一方、華北伝道者には天台徳韶の法嗣に潞州（山西）華嚴慧達（同書卷二十六）がおり、法眼宗は案外華北地方との縁が少なくなかつた。また法眼の玄孫となると、清凉文益が青原下八世なので、その玄孫は同十一世となる。『五灯会元』卷十によつて同世代で生卒年の分かる者を挙げると、長寿法斉（九二二〜一〇〇〇）、浄土惟正（九八六〜一〇四九）があり、通円・通理らより一、二世代上である。ところが雲門宗で青原下十一世には慧林宗本（一〇二〇〜一〇九九）、法雲法秀（一〇二七〜一〇九〇）（同書卷十一）、曹洞宗では芙蓉道楷（一〇四三〜一一一八）（同書卷十四）が見え、彼らは通円らとほぼ同年代である。したがつて、通円らが法眼の玄孫であつても不思議ではなく、大いにありうることである。また法眼宗は北宋中期に断絶していたとい

のも誤りで、十一世紀中ごろの禪宗の状況を述べた『伝法正宗記』巻八には、

評して曰く、……而して雲門・臨濟・法眼三宗の徒、今において尤も盛んなり。瀉仰すでに焔^{ほろ}び、曹洞は僅かに存するのみ。

と述べているのである。ただ灯史等にその名を現さないにすぎない。それにしても、北宋では弱体であつた曹洞・法眼両宗が、異民族支配の燕京に進出していたことは、大いに注目されよう。ただそれがそれぞれの教線拡大をはかつた意図的なものであつたかどうかは、分からない。

「観音堂記」は、右の前文につづいて、時々蓮花峪に隠棲した通円大師法蹟、通理大師恒素と、両師の旧庵を観音堂に改めた通悟大師恒簡それに故山主弘蹟の行実を記録する。

先ず通円大師法蹟（一〇五〇—一一〇四）は、燕京良郷県南石村の人。燕京の開悟寺金剛大師を師として受戒し、華嚴を業としたが、講学に倦きると山中を訪尋し、蓮花峪の絶景なるを聞いて、通理策公とともにここに掛錫して禅定につとめた。その後、道宗皇帝に重んじられて、紫衣と通円の号とを賜り、天祚帝は内殿懺悔主とし、特進守太師・輔通円の号を加えた。彼は燕京の紫金寺に戒壇を開き、おびただしい人々に戒を授け、乾統四年（一一〇四）に五十五歳で示寂した。開悟寺と金剛大師とは未詳、紫金寺は城北開遠坊に在った（『元一統志』巻一）。

通理大師恒素（一〇四九—一〇九八）は、字は開玄、姓は王氏、上谷磐山県（燕京西北）新安の人。七歳で得度、『百法論』を学び、のちに性相の学に通じ、永泰寺の守司徒守臻を師とした。宗天皇太后、道宗皇帝に重んじられて、紫衣と号通理を賜った。涿州において、講義のない日にはひとり杖錫してまわつたが、蓮花峪に至ると庵居して、精進是れ勤めた。道宗に請われて内殿懺悔主となり、山を下りて、永泰寺で開講すると、五京の僧侶がうわさを聞いて集まり、学徒は日に三千を下らなかつたという。『梵行直釈』三卷、『記文』四卷を著し、その遺文は世に盛行した。寿昌四年（一〇九八）、五十歳で示滅した。彼は房山雲居寺の石経の続刻を行ったことでも知られる。

通円、通理の二師も、法均と同じく講学と授戒を業とする教律の僧であり、講經の合い間に禪を修したのであった。碑記によると、二師とも蓮花峪に來たのは五、六次に及び、そのたびに或いは二年二年、或いは一季二季と掛錫して、「妄想を剝除し、定恵を均平にした」という。このように、妄念を除き定慧を均しくするために、深山幽谷の場所を選んで禪定を修めるといのが、遼代の禪の一つのあり方であった。

碑記の前文にいうところの三上人のうちで、寂照大師だけは行実を記さないので、その事績は分からない。しかし、この時代にいた寂照大師という禪僧について記した史料が二種ある。その一つは、陸游「家世旧聞」巻上に記す陸佃の見聞である。元符三年（一一〇〇）回謝使として宋から遼に派遣された陸佃が、中京大定府に至った時、接待役の耶律成に「禪僧はいるのか」と問うたところ、「いる。近頃、寂照大師という深く理性に通じた者がいたが、亡くなった」とのことであった、という。この禪師の卒年は一一〇〇年直前とみられるから、通円、通理二師とほぼ同じころであり、「深く理性に通じた禪風は、華嚴を重んじた法眼宗に合致する。いま一つの史料は、金の呂卿雲「薊州葛山重修龍福院碑」である。それには、「大安間（一一〇八五―一一〇九四）に感禪師という者がいて、巡錫してこの院にいたり、その清幽なるを喜んでここに駐錫した。…道宗はその名を聞いて禁中に召し、延訪して晷とくを移した。よつて紫衣を賜い、寂照大師と加号した云々」とある。この寂照大師も道宗朝の人で、法諱の一字が「感」であったことが分かる。ただ寂照というのはよくある法号なので、果たして前者の寂照大師と同一人なのか、さらには碑記のそれと同じ人なのか、確証はない。一応並記して、今後の検証を待ちたい。

三上人の外、通円、通理の故庵を改修して観音堂を作った恒簡（一一〇二―一一一一）²³は、姓高氏、薊州玉田県三女河の人、母は王氏。燕京永泰寺の疏主守臻を師として出家した。通理恒策と同門である。受具の後、識論を習い、学肆に倦（？）きると山水を尋ね、後に通理の室に入り、深くその堂奥に入った。皇帝に請われて内殿懺悔主となり、特に紫衣を賜い、檢校大師・通悟の号を加えられた。彼もまた講学を棄ててからは、諸叢会をめぐり、「古迹を訪尋して、

志は林泉に在った」という。大安山蓮花峪が通円・通理大師の旧隠の道場であり、群賢養道の所であることを知って、杖錫してこの地に來たつた。乾統十年(一一一〇)、燕京宝塔寺から來た某僧とともに觀音堂を造つた、という。恒簡もまた講学を罷めた晩年は、林泉に親しみ、「叢会」を歴訪したのであつた。

このほか、正慧大師(諱は不明、一〇四二―一一一六)は、恒簡と同じく守臻を師とし、道宗・天祚帝兩朝の懺悔主となつたが、示寂の日、彼は禪室内に霞光七道が現れ、天帝釈らの來迎するのを見た。示滅して「智炬潛輝、禪灯泯照」したと、「遺行塔記」に記されている。²⁰⁾

また、崇豆(一〇三九―一一一四)は、守臻から「□税金論」を授けられ、永泰寺で『唯識論』『瑜珈論』を究め、『華嚴』等諸經を開講したが、大安初(一〇八五)豁然大悟して、ことごとく衣鉢を捨てて遊方、王家島に至つて、通理恒策より「達磨伝心の要」を受け、石經山雲居寺に駐錫して、師とともに房山石經の統刻事業を整えた。その後数年して、仙岩山に遷り寂居した。²¹⁾彼もまた講經より修禪に赴いた者であつた。そうした僧が、道宗朝を代表する学僧の一人である永泰寺疏主守臻の弟子に多いことは注目される。

ところで、唐末には燕京でも盛んであつた臨濟宗は、遼代ではどうであつただろうか。前述の黄春和論文は、法眼を法演の誤りとし、その玄孫を「臨濟正宗之碑」(『仏祖歴代通載』卷二十二)の竹林安に当て、安は遼末に活動していたと推論する(三三四頁)。しかし、後述するように、竹林安は明らかに金人であり、黄氏の推測は当たらない。遼代にもその宗風を伝える臨濟宗の僧はいたかもしれないが、今のところ、碑刻等の史料には見出せない。はつきりとその活動が知られるようになるのは、金代になつてからである。遼代は臨濟宗の空白期であつた、といつてよさうである。

四、金代燕京の禪宗

1、北伝曹洞宗

「禪宗が独り盛行を極めた」といわれる金代で、その活動が目立つのは曹洞宗であり、とくに末期には、燕京を中心に活躍した有名な方松行秀（一一六六—一二四六）が現れた。その行秀にいたる法系も早くから知られており、これが曹洞宗の北伝と呼ばれている。ただ、明末の『五灯会元統略』ははじめ法系の異説も行われて、多くの議論をよんだが、今日では次のように定まっている。

芙蓉道楷—鹿門自覺—青州希辯—大明宝—王山体—雪巖滿—方松行秀

このうち、希辯からが金代であり、活動の場も主に燕京であった。それぞれの法号は明代以後の灯史に拠っていて、それらに異同は認められないが、金元の資料にあたってみると若干の違いがあり、補訂すべき点がある。それらについては、順次指摘していく。

先ず、希辯は明代以後「一辨」ともするが、金元代の史料ではすべて「希辯」となっているので、或説の方は斥けねばならない。また、彼の事績の最も詳しいものは、従来取り上げられることのなかった『元一統志』巻一、大万寿寺中の記事である。それには、前掲の文（五頁）につづけて、次のように記す。

後に禪師希辯あり、宋の青州天寧の長老なり。耶律將軍青州を破り、師を以て燕に帰る。初めこれを中都の奉恩寺に置く。華嚴の大衆、師を請うて住持せしめ、その戒行の高古なるに服し、以て潭柘（従実）の再来と為す。

ここで注目されるのは、希辯が山東の青州から燕京に来たのは自発的ではなく、金軍に捕えられて強制的に連れて来られたということである。『金史』巻三によると、金の完顔宗望が青州を攻略したのは、天会六年（宋の建炎二年、

一一二八) 正月癸卯(八日)のことであった。『建炎以来繫年要録』卷十二では、宗望ではなくて宗輔とする。どちらにも耶律將軍は出てこないで、だれのことか分らない。また、希辯が初めに安置された奉恩寺も『元一統志』には見えないので、由緒ある大刹ではなかったようである。華嚴寺は、前述のごとく、遼代からの曹洞宗ゆかりの寺であり、その寺の大衆に請われて、希辯はその住持になり、ここに金代の曹洞宗が始まることになった。『元一統志』はつづいて、

金の天会間(一一二三—一一三七)に至って、太湖山臥雲菴に退去し、既にして仰山棲隱寺に隱る。驃騎高居安、城北の園併びに寺前の沙井を以て、これを常住に帰し、天眷三年(一一四〇)師を召して復た住持せしむ。皇統初(一一四二)更めて寺名を賜い大万寿寺と為す。師再び仰山に隱れ、門人徳殷万寿に続灯し、三年にして医巫閩に退居す。又省端上人ありてこれを継ぎ、もっぱら師の存する日のごとくす。²⁹⁾

とある。太湖山臥雲菴は未詳。仰山は燕京西方の宛平県、現在の北京市門頭溝区にある高峻な山岳で、ここに五代後梁開平四年(九一〇)の鑄鐘記があつて、当時は仰山院といつたというから、五代初にはすでに寺が建てられていた。『元一統志』卷一、棲隱禪寺の条では、「寺記」によつて、希辯が徳真通辯大師の請を受けて、天会六年に仰山に住持したと記すが、その年は彼が初めて燕京に來た年である。彼が仰山に退隱したのは、それよりずっと後のことと思われる。その後、彼は天眷三年に召されて華嚴寺に再住、翌皇統初に華嚴寺は名を改めて大万寿寺となつた。彼は再び仰山に退隱したが、その年は記されていない。ただ、「円正法師靈塔記」(皇統六年一一四六立、「凶志」下八八、八九頁)の記末に、「仰山棲隱寺退居嗣祖沙門希辯記」とあるので、皇統六年以前であることは確実である。なお、棲隱寺は右の「寺記」では大定二年(一一六二)の賜額とし、「仏祖歴代通載」卷二十では大定二十年(一一八〇)の勅建とする。³⁰⁾ そのどちらが正しいのかは即断できないが、棲隱の寺名は、それよりも早い時からあつたことが、右の希辯の肩書から知られる。

以上の希辯の事績は大万寿寺の「古記」に拠るものだが、以下は施宜生撰述の碑記に拠るとみられる。

希辯師は、もと江西洪州の黄氏、族系は甚だ大にして、且つ文人多く、世に聞こゆる者あり。始め雲門、臨済に参じ、法を鹿門覚公より得、沂州に至つて、芙蓉和尚を礼して印記授記せられ、後に青社の天寧に住す。城破れて乃ち北来す。人かれを称して青州和尚と為す。天徳初（一一四九）仰山に示化す。記は乃ち金の翰林学士・中靖大夫・知制誥施宜生の撰する所なり。その文略に云う（下略）。貞元元年（一一五三）十月記。³²

希辯の俗姓が黄氏であることは『仏祖正宗道影』³³卷三の伝でも知られていたが、その一族が甚だ大にして、しかも文人が多いというのは、他にない記事である。その文人のなかには、北宋の大詩人黄庭堅も入るのかもしれない。希辯自身も文才があり、前掲「円正法師靈塔記」を撰し、今は佚して伝わらないが、先師鹿門自覺の塔誌も撰していた³⁴。

ところで、希辯の碑記を撰した施宜生（一一一六〇）は、宋で罪を得て北方に亡命し、金に仕えて翰林侍講学士にまで上ったが、宋国正旦使として南宋に使用した時、陰語で金の情報を宋朝に密通したかどで、帰国するや烹（かまゆで）の刑に処せられた（『金史』卷七十九）。なお、包世軒氏が一九八四年に仰山文物を調査中、寺址内の草むらから白玉石の「辯公大師遺行碑記」と刻した篆額を発見した。これが貞元元年施宜生が撰した碑記に違いないと記している。³⁵

希辯の事績でとくに注目されるのは、仰山棲隱寺に薬局を開設し、それに諸禪利がならうようになったということである（元好問「少林薬局記」『遺山先生文集』卷三十五³⁶）。薬局の具体的なことは分からないが、前掲「円正法師靈塔記」を書写した「西蓋医人莊彦和」は、恐らくこの薬局の医師であつたらう。ともあれ、希辯は金代曹洞宗の始祖として、後代に大きな影響を及ぼした巨匠であつた。

希辯の法嗣を灯史類はいずれも「大明宝」として法諱の一字を欠くが、「宝公禪師塔銘」³⁷によつて、法諱は「法宝」

であることが分かる。その「塔銘」によれば、彼は俗姓武氏、磁州（河北）の人。十九歳の時、磁州寂照菴の祖栄について剃髪、天眷三年（一一四〇）試経具戒した。はじめ臨濟宗を参究したが、希辯が洞下の正法眼蔵を伝え、燕都の万寿禅寺において法を説き、禅侶雲集していると聞いて、燕京に赴き、彼に参じて大悟した。後に師を辞して山東に遁跡したが、請われて名利靈巖寺の住持となった。皇統九年（一一四九）八月の「宝公開堂疏」の石刻が現存する（『北図』四六一三九、『金文最』卷一一五）。しかし、その年「塔銘」は天徳二年に希辯が仰山で示寂したので、法宝がその後を継いで棲隱禅寺住持となった。したがって、彼が靈巖寺住持であったのはごくわずかの期間の間である。貞元三年（一一五五）、磁州に帰って年老いた師の祖栄を侍養し、大定二年（一一六二）、南陽尹王氏が己の俸をもつて大明寺額を買うと、命じられてその住持となり、同十三年（一一七三）六十歳で示寂した。

嗣法の門人には、当山（靈巖）住持恵才、蔚州人山住持善恒、太原王山住持覚体、中都万寿住持円俊、中都仰山住持性璘、磁州大明住持円智がいた。そのうち、恵才は「塔銘」の建立者であり、彼もまた靈巖寺の住持となり、「才公禅師塔銘」（『北図』四六一一八六、『金文最』卷一一）がある。つづく人山善恒と王山覚体とは、ともに「五灯会元統略」巻一に伝を載せるが、二人の法諱はこの「塔銘」によってはじめて知られる。また各伝の主な史料源は、万松行秀の『従容録』と『請益録』とであり、記述内容に大きな異同はない。⁴¹

中都すなわち燕京の万寿住持円俊と仰山住持性璘との伝は未詳。かつて希辯が住した燕京の大方寿寺と仰山棲隱寺の住持が、その直系の法孫によって承継されていることは注目される。それは、金末元初の万松行秀にまで及ぶ。両寺は実に北伝曹洞宗の一大拠点であったのである。

ところで、王山覚体は、大明法宝の侍者を十年にわたつてつとめた。その後久しく西山に隠居したが、太原府の府知事と転運使の要請を受けて王山に住持し、禅席を創建して、皆は「開堂出世」と号した（『請益録』第三十則）。以上が覚体の経歴のすべてである。同輩の人（仁）山善恒については、『五灯会元統略』には、『請益録』第二則の記事

を引くとともに、冒頭に「久しく大明に侍して、遂に堂奥に升る」を加える。

王山覚体の法嗣は磁州大明雪巖満であり、『五灯会元統略』巻一に伝があり、かなり長文である。その首の二話が、『従容録』第七十二則と『請益録』第十八則からの引用であり、それぞれ原文と異なるところがある。『従容録』の方はやや長文なので、原文のみ注(42)に掲げる。その始めに記す鄭州宝和尚は未詳。『統略』は普照宝とする。そうだとすると、後述の臨濟宗虚明教亨の師であり、『統略』巻四に伝がある。「兄弟年俊」以下「作家那」までは『統略』も同文。それ以下にも異同がある。つづく第二話の『請益録』の方は、

雪巖先師、勝黙師伯に事え、跪いて呵斥を受く。或るひとその故を問う。曰く、今の諸方、或いは師資・法属、
 諍訟して譏りを招くことあるは、獅子身中の虫、自ら肉を食うなりと。⁽⁴³⁾

とある。『統略』は「事」を「同参」に変え、勝黙も王山体の法嗣として雪巖満の次に立伝するが、それは誤りであろう。勝黙の伝は未詳だが、『請益録』には三ヶ所(第六十、第六十五、第七十八則)、『従容録』には二ヶ所(第四十六、第六十二則)に見え、「万松は昔年勝黙に参じた」(『請益録』第六十五則)といい、万松は彼のことに詳しかったようである。彼はまた万寿寺に住したこともあった(同第七十八則)。しかし、万松は彼を勝黙とか勝黙和尚と記すだけで特別な敬称は用いていないので、法系の上では親密でなかったと思われる。『統略』が「勝黙光禪師」とするが、その出拠は明らかでない。

雪巖満は、『統略』によると、「その後王山に造^{いた}つて、心印を發明し、踵を接して住持す」という。覚体について王山に住持したようであるが、『磁州大明』にはいつ住持したのか、伝には記されていない。そもそも、伝の「其後」以下は他の史料に拠ったものである。雪巖という道号の由来、法諱の上の一字も不明。ただ、万松がつねに「先師」と呼んでいるので、万松の師であることは間違いない。

雪巖満の法を嗣いだ万松行秀は著名な僧であり、その伝記については永井政之氏の考証があるので、本稿では触れ

ないこととする。またこの外、燕京の曹洞宗に関わる、塔銘等の存する僧に、希辯の法嗣行通、法宝の法嗣惠才がいるが、ともに石井修道氏の研究がある⁶⁵ので、これらも省略する。

2、金代の臨済宗

金代の臨済宗については、『五灯会元統略』はじめ明清の灯史に全く記載がなく、中国禪宗史において、遼代につづく空白の時代である。ところが、この時代の碑刻には臨済僧の塔銘が少なくなき、『補続高僧伝』には、それらを史料にして伝を立てている。また、『仏祖歴代通載』『釈氏稽古略』にも、臨済僧の記事は見つけられるが、それらを用いた研究は稀であつて、金代臨済宗は全く未開拓の分野といつてよい。そこで本節では、碑刻等を史料として、金代臨済宗の素描を行つてみようと思ふ。

金代臨済宗を代表する禅僧は円性(一一〇四―一一七五)である。彼の伝は、楊邦基(？―一一八二)撰述の塔石(佚)に拠るといふ『補続高僧伝』卷十二と『潭柘山岫雲寺志』(以下『寺志』)卷一とにあり、前者の方が詳しい。後者は法諱を開性とするが、恐らく誤りであろう。この二つの伝によると、円性は順州(中都)懷素泉靈跡里の人。父は侯琦、母は杜氏。九歳の時、都城の奉福寺戒振に依つて出家し、十五歳で受具し、『唯識』『起信論』を習つた。天会初(一一二三)？、汴(開封)に來た仏日禪師に師事し、仏日が遼陽に招かれると、彼も侍行して惠安寺に來たり、推挙されて立僧となつた。のちに皇后の教旨をもつて韓州(遼寧)功德院に住したが、間もなくそこを去つて、黄河を渡り、汴から洛陽、さらには関右にまで巡歴した。天徳初(一一四九)、海陵王の旨をうけて中都燕京の竹林寺に住持し、翌年遼陽の惠安寺に徙り、明肅皇后？の帰依をうけた。しかし、竹林寺の旧衆は師の教化を忘れがたく、策略を設けて彼を連れ歸つた。海陵王は彼に広慧通理の号と紫衣等を賜つた。大定年間(一一六一―)、僧善誨ら十余輩の要請をうけて潭柘寺に住した。潭柘寺は前述のごとく、遼初に従実が居た古道場であつたが、彼は「禪学地を掃

うこと二百余年、吾まさに起廢せん」と、大規模な復興事業を企画し、十一年かかって落成した。「塔石」では十年足らずという。竹林寺に居た時にも、この寺が遼道宗の長公主の施捨した宮殿様式の建物であったのを、禪堂に改築した。大定十五年（一一七五）潭柘寺で示寂した。寿七十二、臘五十七であった。『語録』三巻が世に行われ、彼が著した寺中の規条は後代まで遵守されていた。今も潭柘寺塔院内に、大定十五年建立の広慧通理禪師塔一八角七層密檐式磚塔、高二十余米一が建つ。ただし、楊邦基の塔記はない（『図志』上六〇～六一頁）。『補統高僧伝』円性伝の明河の後記に、楊邦基の「塔石」の文を引いて、

仏果、西蜀より汴に來たり、心印を以て仏日に伝え、仏日は広慧に伝う、南岳下十七世なり。⁴⁶

と記す。仏果すなわち圓悟克勤が汴（開封）に來て天寧万壽寺に住したのは宣和六年（一一二四）四月であり、二年後の靖康元年（一一二六）暮には、開封は金軍に陥落し、克勤はその以前に都を離れて南に下っている。したがって、仏印が克勤より心印を得た時は、宣和六年か七年のこととなる。なお、克勤は南岳下十四世なので、仏日は十五世、円性は十六世となり、十七世とするのは誤りである。

ところで、円性が嗣法した仏日禪師とはどういう人物なのか、伝がないので、出自など詳しいことは分からない。円性伝では、天会初（原文「天徳初」とするのは誤り）に仏日禪師は汴に入ると、円性は袖香して彼に謁し、仏日はその器なることを黙識して受け入れたとある。『寺志』の伝では、両者の出会いを天眷初（一一三八）とするが、それでは遅すぎるであろう。開封陥落の際、師の克勤が都を離れて南に移ったのに対して、仏日らはそのまま開封に留まったらしく、やがて招請をうけて遼陽に赴き、大刹惠安寺に住した。明河の後記では、円性はしばしば仏日に従って禁中に入って法を説いたと、「塔石」の文にあるというから、中都燕京にも来ていたことがしられる。

現に北京門頭溝区潭柘寺塔院内には、金代に建てられた高さ二十余米、六角密檐式の磚塔があり、「仏日円明海雲大禪師之靈塔」の額が嵌め込まれている（『図志』上五八～五九頁）。『寺志』巻一によれば、天眷時（一一三八～

一一四〇)の建立という。同書「歷代法統」のところでは、彼は大定年間(一一六一―一一八九)の人とし、金末元初の同名の者(印簡)と混同してはならないと、とくに注記する。ただし、その事績は未詳として記述しない。彼が潭柘寺とどのような関係にあったのかも、知ることはできない。燕京の仏日については、後述するように、万松行秀が興味深い逸話を多く記録してくれている。その仏日がこの仏日禪師と同一人かどうかは、今一つ明らかでない。

さて、円性の法嗣として、伝には善照、了奇、円悟、広温、覚本の五人を挙げる。そのうち、円悟と覚本以外は碑銘がある。以下、それらによって、各人の略伝を記していこう。

a、善照(一一二二―一一六八)「中都竹林禪寺堂頭懷鑑禪師碑銘」(『北図』四六一―九六) 瀋州(遼寧) 章義の人、俗姓馬氏、法諱善照、字懷鑑。幼より釈氏を慕うも、父母は出家を許さず、強引に妻を娶らせた。十九歳の時家を飛び出して出家し、二十二歳で受具し、团山宗主禪師の勧めで、東京遼陽の惠安寺において大いに臨済の宗風を振るっていた仏日円証和尚の下に参じた。「証」は「明」の誤りであろう。その時、立僧であった広慧通理禪師(円性)について侍者となり、禪師が遊方するとそれに従行した。正隆五年(一一六〇) 広慧が竹林寺住持を退くと、彼は立僧となり、翌年広慧の後を継いで住持となった。ところが、大定八年(一一六八) 六月、急に竹林を退き、郡侯はじめ多くの人々の懇請を受けて薊州雙峯重禪院に住した。しかし、その年十一月三日、疾によって示寂した。世寿四十八歳であった。翌大定九年三月に雙峯院西隅に葬り、山主覚本らが塔を建てた。碑銘は中都路転運副使賈少冲の撰文である。

b、了奇(一一二〇―一一七〇)「中都竹林禪寺第七代奇和尚塔」(『北図』四六一―三六、『凶志』上二五〇―二五二、下九九頁)、『補統高僧伝』卷十二 白雲富庶県(内蒙古寧城西)の人、俗姓潘氏。年十三の時、医閻(今の医巫閭山)の円晝について落髮。次年、北京(大定府) 円宗寺の慧業に師事。十六歳で試経得度して華嚴を学んだが、玄奥を窮めても第一義に非ずとして、叢席に向かうこととなり、遼寧地方で唱道していた広慧通理禪師に参じ、師に

従行して雲峰寺にあつた時、善照とともに広慧の印可を得。了奇は広慧が南して燕京に赴いて中都竹林に居る時まで、十年にわたつてその指導を受けた。大定七年、善照が竹林を退くと、王侯士庶、禪律の諸徳に乞われて竹林第七代の住持となつたが、同十年二月七日、世寿五十一歳で示寂した。同十九年（一一七九）、塔を潭柘寺の広慧塔の東に建立、現存する。

c、広温（一一〇六〜一一六八）「薊州雙峯重巒禪院庵主和尚碑銘」（『北図』四六一九七、『欽定盤山志』卷八）高州高安の人、俗姓韓氏。幼くして出家し、經を習法師より受く。後に同昌（遼寧）の英公に謁し、ついで雲門の晦堂、竹林の広慧に参じて、それぞれ印可を得た。大定二年（一一六二）、薊州盤山の雙峯禪院の庵主となり、同十年六月二十七日に六十三歳で示寂した。翌年三月、塔は院の西南隅に建立された。前述の善照は彼の後継ぎとして招かれたが、その年のうちに早逝した。しかも、塔は広温のよりは五日早く建てられている。広温の碑銘も賈少冲の撰文である。

d、覚本 碑銘がなく、伝は未詳。a「懷鑑禪師碑銘」の末行に、「院主善榮 山主沙門覚本 建」とあるので、彼もこの禪院の責任者の一人であつたことが知られる。c「広温碑銘」にも、摩滅しているが、同文らしき文字がかすかに見える。なお、円性の第四の法嗣円悟は、他の碑刻に全く現れない。

円性の法嗣ではないが、彼とも関係があり、碑刻もある臨済宗の僧に、政言と相了とがいる。

e、政言（一一二五頃〜一一八五）「中都潭柘山龍泉禪寺言禪師塔銘」（『北図』四六一八九、『図志』上三二二〜二五三、下一〇五〜一〇六頁）、『補統高僧伝』卷十二、『寺志』卷一 俗姓王氏、許州（河南）長社の人。九歳で出家受具し、十余年して南京（開封）の浩公僧録について『唯識論』を学び、二十一歳にして『唯識』・『因明論』・『上生經』を講じ、また大乘戒を伝えた。かくすること十二年、心を禪道に留めるようになり、諸方を遊歴して燕京に至り、竹林の広慧通理禪師（円性）に参じて記室を命じられた。その後、益都（山東）の義安院などの住持になつたが、梁国大長公主（世宗の女）と皇子の東京留守晋王の招請を受けて潭柘寺の住持となり、『頌古』『拈古』各百篇等を著

して世に行われた。隠退後は潁水のほとりに棲み、大定二十五年に示寂した。汝州（河南）香山に葬られ、燕京の潭柘寺にも分骨した。大定二十八年（一一八八）建立の石幢塔が潭柘寺塔院内に現存する（『図志』上二五二頁）。

f、相了（一一三四～一二〇三）「第九代了公禪師塔銘」（『北図』四七一九一、『図志』上二五四～二五五、下一一四～一一五頁）、『補続高僧伝』卷十二、『寺志』卷一 俗姓宋氏、義州（遼寧）の人。幼にして出家し、名を行録といつた。九歳の時、皇統（二年）の普度に遇つて得度、華嚴、円覚等の經を習つた。後に、遼陽の禪刹清安寺の月公、咸平の禪林の定公、錦州大明の誘公と次々に参じたが得るところがなかつた。ようやく懿州崇福の超公から印可を得て、名を相了と改めた。これによつても、当時の遼寧には各地に禪刹があり、その間を歴參して師を求めることができたようであり、この地方への禪宗の進出ぶりが窺われる。彼は懿州の崇福寺、東京遼陽の大惠安寺に住したのち、岐国大長公主に請われて燕京の潭柘寺、ついで冀国公主に請われて竹林寺の住持となつた。塔銘首題に「第九代」とあるのは、竹林寺住持のことであろう。泰和三年（一二〇三）潭柘寺で示滅した。世寿七十であつた。翌四年、門人らにより石幢塔が塔院内に建てられ、現存する（『図志』上二五五頁）。ところで彼の法系であるが、塔銘中に「仏鑑遠裔、明州親孫」とある。仏鑑とは、臨済宗楊岐派三世の太平仏鑑慧勲（一〇五九～一一一七）で、仏日円明の師圓悟克勤と法兄弟に当たる。つづく明州とは、『嘉泰普灯録』目録に記す慧勲の法嗣十七人中、「機語未見」七人のなかの「明州啓霞楚謙禪師」のことであろうか。明州とのつながりは全く分らないが、その法孫だとすると、円性門下の善照らと同じ輩行であり、その点では矛盾しない。しかも、彼も潭柘・竹林両寺の住持をつとめており、円性らとはとくに密接な関係にあつたことが窺われる。

以上みてきたごとく、広慧通理禪師円性は、地元順州の出身であるが、中都燕京だけではなく東京遼陽にも伝道し、その門下にも、今の内蒙・遼寧地方の出身者が多かつた。東北地方への進出、それが金代臨済宗の一つの特色といえるであろう。もちろん、活動の拠点燕京にあり、なかでも潭柘・竹林両寺の住持は、代々臨済宗の僧によつて継承

された。とくに潭柘寺は円性が再建して大定十一年（一一七一）に落成し、彼がその開山となった。

万松行秀『請益録』第三十一則に、

近代の老青州、潭柘開山の性和尚をば、韓相國昉、施学士宜生は曰く、一老若し仏に事え出家するにあらざれば、皆王霸の器なりと。

とある。これははなはだ興味深い評語である。韓昉（一〇八二～一一四九）は參知政事までのほった政治家で、施宜生（？～一一六〇）は前述の亡命文人。その二人が「近代の老青州すなわち希辯と潭柘開山の円性とは、仏門に入つて出家しなかつたなら、二人とも王者が覇者になる器だ」といったという。これによつても、円性が金代曹洞宗の祖希辯と並び称せられる、当時の臨済宗を代表する巨匠であつたことがしられる。

円性とその門下たちのほかにも、燕京にいた臨済宗の僧は少なくなかつた。その一人が玄冥顛公である。彼は灯史等に伝がないので、その経歴は分からないし、法諱の一字も不明であるが、大定二年（一一六二）城北に大慶寿寺が勅建されると、その開山第一代を命じられ、同二十年（一一八〇）西山に仰山棲隱寺が勅建された時も開山となつたことが知られている（『仏祖歴代通載』巻二十）。また、同八年遼陽に清安寺が創建された時にもその開山になつており、彼は時の皇帝世宗（在位一一六一～一一八八）の寵遇を集めていた。

第二は虚明教亨（一一五〇～一二二九）。彼には『仏祖歴代通載』巻二十に載せる塔記があり、『大明高僧伝』巻五、『仏祖綱目』巻三十八はじめ諸灯史もこれに拠つて立伝している。彼は濟州（山東）任城王氏の子。七歳で出家し、十三歳で具足戒を受け、十五歳で遊方して、鄭州普照の宝より印可を得た。嵩山の戒壇、韶山の雲門、鄭州の普照、林溪の大覺、嵩山の法王と住したのち、丞相夾谷清臣に請われて中都の潭柘に住した。のちに章宗（在位一一八八～一二〇八）の勅旨をもつて慶寿寺の住持にもなつた。またしばらくの間、少林寺にいたこともある。

ところで、玄冥顛公と虚明教亨については、元好問「太原昭禪師語録引」（『遺山先生文集』巻三十七）に重要な記

述がある。

慈明(楚円)と瑯琊覚(慧覚)とは皆法兄弟にして、共に臨済の一枝を扶す。慈明而下十余世にして、玄冥顛禪師を得、瑯琊而下亦た十余世にして、虚明亨禪師を得。玄冥は風岸孤峻にして、許可する所なく、寧ち嗣を絶ちて伝わらず。虚明は接納に急なり。故に子孫は天下に満ち、又皆その家を称う。慈雲海、清涼相、羅漢汴と王昭公のごとき、皆是れなり。屏山、虚明の為に墓誌を作り、以為らく二公は伝わると伝わらざるとの異ありと雖も、その道は並び行われて相い悖らざるなり、と。

慈明楚円(九八六—一〇三九)と瑯琊慧覚(生卒年未詳)とは、ともに汾陽善昭の法嗣で臨済下六世である。楚円の裔孫が玄冥顛禪師、慧覚の裔孫が虚明教亨であるという。それぞれ十余世後という世代数は当てにならない。この記事によると、顛公と教亨とは同輩のようだが、両者の性格や接化の方法は異なっていた。顛公は峻厳な性格で、弟子に印可を与えなかった。その法系は絶えて後に伝わらなかった。それにひきかえ、教亨は弟子をどしどし受け入れたので、その子孫は天下に満ち、またそれぞれが一家をなしたという。屏山李純甫(一一八二—一二三二)は教亨の墓誌を作り(佚)、二公は子孫が伝わるのと伝わらないのとの違いはあっても、「その道は並び行われて、互いに矛盾しあわないのだ」(『中庸』第三十章)と述べたとある。ちなみに、柳田聖山「中国禅宗史系図」(『禅家語録Ⅱ』筑摩書房、一九七四年)によると、瑯琊慧覚から七世、すなわち臨済下十三世で教亨に至る。原文の「十余世」を臨済下とすれば合致するが、どうであろうか。なお、教亨の法嗣のうち、清涼相については元好問「清涼相禪師墓銘」(『遺山先生集』卷三十一)があり、汴公については同じく元好問の「告山饗禪師塔銘」(同右)中に引用され、その門下の繁栄振りを窺うことができる。ただ、『五灯会元统略』等は、教亨を「未詳法嗣」中に入れる。

法系の明らかでない禅僧に、金初の海慧(？—一一四五)がいる。その伝は『大明高僧伝』卷七にある。初め講肆に学んだが、五台山に入って隠棲すること十五年に及んだ。しかし、衆生教化こそが急務とさとり、山を下りて燕京

に來たり、遍ねく禪寺をめぐつて教化につとめた。皇統三年（一一四三）、熙宗が亡き太子のために上京會寧府に大儲慶寺を建立すると、彼をその開山第一代とした。皇統五年遷化すると、舍利は五ヶ所に分けて塔を建て、彼に仏覺佑国大禪師と諡した。その師号は後述の雲門宗の仏覺禪師、晦堂禪師と似ているが、別人である。海慧遷化の翌年正月、清慧禪師に詔して儲慶寺の後住とし、仏智護国大師の号を賜い、命じて国師の座に登らしめ、皇帝后妃太子が雙足を頂礼し法衣を奉服した（『大明高僧伝』）という。この二人がどの宗派に属したのかは分からない。一応ここに掲げておく。

臨濟宗といへば、元の至大二年（一三〇九）趙孟頫奉勅撰「臨濟正宗之碑」（『仏祖歴代通載』卷二十二）に触れておかねばならない。この碑文には臨濟以来の系譜を記し、北宋末の五祖法演以下は次のごとくなっている。

五祖法演—天目齊—懶牛和—竹林宝—竹林安—容菴海—中和璋—海雲簡（以下略）

このうち、竹林宝からが少なくとも金代に属する。竹林宝と竹林安とは燕京の竹林寺に住した僧であろうが、前述の第七代了奇、第九代相了との前後関係は分からない。なお、『請益録』第八十則に、「竹林安和尚、衆沙童と草を抜く云々」の話を載せ、右の竹林安と同一人とみられる。

最後に、仏日和尚を取り上げよう。前述のごとく、仏日円明海雲禪師は開封において圓悟克勤より嗣法し、遼陽に招かれて惠安寺に住した。また、しばしば円性を伴つて禁中に入つて説法し、潭柘寺塔院内にはその塔が現存する。この仏日禪師とは別に、もう一人の仏日和尚がいたようである。万松行秀は『従容録』『請益録』のなかで、彼について多くのことを記している。一々挙げるのは煩瑣なので、それらをまとめてみると、次のようである。仏日は臨濟宗の一枝を引つ提げて北來し、燕京の聖安寺に寄寓してその宗風を宣揚し、弟子の獲得にも熱心であった。しかし、その努力もむなし、遂に後継者は得られず、彼の後は絶えた。彼が北來した時期は、希辯の曹洞宗や仏覺の雲門宗がすでに燕京に行われ、円性一門がまだ進出していかなかった、金代前期のころのようである。^⑤

以上のごとく、金代の臨濟宗は、曹洞宗が希辯の一系列のみであったのに対して、その法系は多様であった。楊岐派・圓悟克勤の法孫に当たる広慧通理禪師円性とその門下は、燕京だけでなく遼寧地方にも進出していた。それとは別に、臨濟下六世の慈明楚円と瑯琊慧覺の裔孫である玄冥顓公と虚明教亭とは、それぞれ独自の宗風を發揚し、前者は後が絶えたのに対して、後者の子孫は天下に満ちていた。また、相了は克勤と法兄弟の仏鑑慧勤の法系であり、海雲印簡は慧勤と法兄弟の天目齊の法系に属した。法系は不明だが江南から来た仏日和尚も、燕京で臨濟宗の進出につとめた。彼らの主な活動拠点は大潭、竹林、慶寿の諸寺であり、帝室の信奉と寄進を受ける者も多かった。このように、当時の臨濟宗は盛況であったが、彼らの著作や語録などは一切遺つておらず、その宗風を窺うことはできない。それが後世忘れ去られる大きな原因であったと思われる。

三、金代の雲門宗

雲門宗は北宋時代には臨濟宗と並んで盛大であったが、南宋になるとすっかり衰え、灯史から姿を消した。しかし、『五灯会元統略』凡例には、

雲門宗は宋より元まで、代々人に乏しからず。円通善、王山済の如きは、俱に明眼の宗哲にして、法席甚だ盛んなり。但し、嗣法は考う可きなし。豈にその徳を深く藏して著わるるを求めざるか、そもまた末流の見聞広からざるか。⁽³⁾

と、宋から元まで世々すぐれた禪僧は少なくなかったが、その嗣法は明らかでない、という。そして、巻四「南嶽下二十三世」の末に、「禪門達者の世に出でざるものと、世に出づるも未だ法嗣を詳かにせざる者とをここに附す」として、二十六人を付伝する。その初めの五人が次の「系雲門宗」と夾注する者である。

①青州仏覚禪師 綱法未詳②円通善国師 嗣仏覚③燕京慶寿玄悟玉禪師 嗣円通④黄山趙文孺居士 嗣円通⑤高郵定禪師 嗣玄悟

注目されるのは、それぞれの伝は主な史料源を万松行秀の『従容録』『請益録』に拠っていることである。およそ、万松のこの両録中の「師云」で始まる「評唱」の部分は、自らも述べるように、ふんだんに「機縁の事迹」(『従容録』序「寄湛然居士書」)を載せており、唐宋の禪僧はもとより、金代、とくに親しく見聞した当代人の事迹にまで及んでいる。金代の禪宗史文献^⑤が皆無であるなかで、それらは貴重な史料といわねばならない。そこで、明代の灯史『五灯会元統略』がこれを利用してのもの、宜なるかなである。既に、曹洞宗では万松に繋がる諸僧の記述、臨済宗では仏日和尚の逸話等が『従容録』『請益録』に基くことを指摘したが、雲門宗の場合はとくに依存度が大きい。

しかし、誤った引用もある。①を青州仏覚禪師とするが、これは注(50)に引用した(ハ)「青州・仏覚両派既行、仏日提一枝臨済禪云々」(『請益録』第五十二則)に拠っているが、原文が青州(希辯)と仏覚の両派とあるところを誤って一つの法号としており、正しくは単に「仏覚禪師」とすべきである。仏覚伝の今一つの引用は、『従容録』第二十六則の「仏覚頌」であり、両録とも仏覚の行歴についての記述はない。ところが、『元一統志』巻一大聖安寺の条に、「寺記」によつて、

金天会中(一一二三〜一一三七)、仏覚大師瓊公、晦堂大師俊公、南より化に応じて北し、道誉日に尊く、学徒万指なり。^⑥

とあり、仏覚大師瓊公というのがこの雲門宗の仏覚に他ならない。彼は晦堂大師俊公と、恐らく金の華北征服にとも

なつて北上し、燕京に来て道誉を高め、多数の学徒を集めたという。「寺記」はつづいて、帝后が金銭数万を出して營繕費として、大伽藍を作り、皇統初(一一四二)名を大延聖寺と賜わつた。大定三年(一一六三)には晦公に命じて新堂を創建させて、同六年に落成、同七年二月、寺額を改めて大聖安寺とした、と記す。これによると、晦堂は仏覚より後輩であつたとみられる。

北京市昌平区にある銀山塔林に五座の金代の塔がある。その一が祐国仏覚禪師塔―八角十三層密檐式磚塔、高二十二・八米、その二が晦堂佑国仏覚大禪師塔―八角十三層密檐式磚塔、高十八・五米であり、それらが仏覚瓊公と晦堂俊公との塔であることはいままでもない。しかも、塔林には「重建大延聖寺記」碑(大定六年三月三日建)があつて、碑文には「隱峰十咏」が刻まれ、その一に「仏覚塔」があつて、次の詩が刻されているという。

示生臨濟村、示滅長慶寺。非滅亦非生、誰明仏覚意。分彼黄金骨、葬此白銀峰。宝塔聳霄漢、僧來訪靈踪。

初句の「示生臨濟村」は臨濟院のある鎮州(河北)に生まれた意であろうか。示滅した長慶寺は未詳。「彼の黄金の骨を分けて、此の白銀の峰に葬る」とあるので、仏覚が歿したのは建碑の大定六年以前であることが知られる。

②の円通善国師については、その言葉が『從容録』に六ヶ所(第十六、第二十九、第八十九、第九十一、第九十二、第九十三則)、『請益録』に一ヶ所(第二十九則)に見え、前者第二十八則には「手書二頌」も載せ、万松がいかに彼を重んじていたかが窺える。そのうち『五灯会元統略』には、『從容録』第八十九、『請益録』第二十九則を引くだけで、他は別の史料に拠つている。とくに伝の初めに記す、十二歳の円通が仏日をやり込めて、仏日を賞歎せしめた話〔注(50)仏日和尚関係資料(二)〕、およびそれに続く、金の世宗が聖安瑞像殿に幸し、彼の応対に大いに悦んだという話は、ともに万松の両録には見えない。

銀山塔林には、円通の塔も建つている。「円通大師善公靈塔」六角形七級密檐式磚塔、高十四・七米がそれである。ただし、『図志』上六八頁の説明では、「善」を「扇」に誤る。

円通の法嗣③玄悟玉禪師の記事は万松の面録にないが、『請益録』第四十三則に、万松は昔その法席に在って、一年に兩度入室し、半年を経てやっと告香入室した云々とする。次の⑤高郵定禪師は、『五灯会元統略』は玄悟の法嗣とするが、『請益録』第四十三則では「玄悟の師、高郵定和尚の悟処」とする。どちらが正しいのであろうか。また伝には、『從容録』第三十三則にある問答も記している。

【統略】凡例に、雲門宗の明眼の宗哲として円通善とともに挙げる王山濟は未詳。また銀山塔林の金塔五座のうち、「故懿行大師塔」（八角十三層、高二十一・五米）と「故虚静禪師実公靈塔」（六角七級、高十四米）との各塔主も雲門宗の僧ではないかと思われるが、記録がないので確かめられない。

以上のごとく、金代の雲門宗の史料はきわめて少なく、諸僧の伝歴もほとんど分からない。わずかに、燕京の大延聖寺Ⅱ大聖安寺を拠点にして、年代は金初から世宗の大定年間にわたって活躍していたことが知られる程度である。ところが、銀山塔林には五座の金塔があつて、いずれも雲門宗の僧の塔であるらしく、そのうち仏覺・晦堂・懿行の三塔は二十米前後の大塔であり、その偉容は当時の雲門宗の盛大さを物語っている。しかしながら、金末元初、曹洞宗には万松行秀、臨濟宗には海雲印簡らが現れて、それぞれ勢力を拡大していったのに反して、雲門宗は世の中から姿を消していったようで、金末以後、灯史に雲門宗の僧は全く見られなくなった。それが、上記凡例が記すように、明哲の宗匠が世に著れるのを求めなかつたためなのか、末流の見聞がせまくて立伝できなかつたためなのか、われわれにも分からない。

注

(1) 古松崇志「法均と燕京馬鞍山の菩薩戒壇—契丹—遼」

における大乘菩薩戒の流行—『東洋史研究』六五—

三、二〇〇六年、一六頁。

(2) 北京市門頭溝区文化文物局編『門頭溝文物志』（北

京燕山出版社、二〇〇一年）五九頁。また五八頁に、

応県木塔発見の「上生経疏科文」の題記「燕京仰山寺前楊家印造」の仰山寺を西山のそれとするのも誤

- りで、この仰山寺は城内帰厚坊にあった同名の寺のことである。
- (3) 師問僧、什麼処来。曰、幽州。
汝是什麼処人。曰、幽州人。
- (4) 大万寿寺 在旧城。按古記考之、本中都大万寿寺潭柘禪師之古道場也。燕京之西有古刹、距城百里、泉石最幽処、名曰檀柘。師諱從実、自湖南来、乃曹洞二代孫、遼太宗会同年間至。
- (5) 『五灯会元』卷六は、青原下六世、中雲蓋法嗣に誤る。なお、法兄弟の証覚は『祖堂集』卷十二に伝がある。
- (6) 師与其徒千人、講法潭柘、宗風大振。後示寂華嚴祖堂、建塔山中。餘姚謝遷嘉福寺碑記載其事。
- (7) 修洵主編『仏教与北京寺廟文化』(中国民族大学出版社、一九九七年) 潭柘寺(徐威執筆) 三九頁。
- (8) 鈴木哲雄『唐五代の禪宗』湖南江西篇』(大東出版社、一九八四年) 三二六頁。
- (9) 世宗天祿初、有開龍禪師智常、弘潭柘之道、於燕創此寺。
- (10) 七歲侍行湖外去、岳陽楼上敢題誌。『鄭守愚文集』卷二「卷末偶題三首」の第二首、また同書卷一「長安夜坐懷寄湖外稽処士」。
- (11) 南汴「上方感化寺碑」『全遼文』卷十
法堂仏宇敞乎下、禪寶経龕出乎上：使禪枝伎裔保有其業。
- (12) 碑題は「馬鞍山故崇祿大夫守司空伝菩薩戒壇主大師道行碑銘并序」、『図志』下一四頁、『遼代石刻文編』四三七～四四〇頁、古松前掲論文四四三～四四四頁―録文最も正確。また伝は「補統高僧伝」卷十七にある。
- (13) 雖行在毘尼、志向達磨。因負笈尋師、不解衣者多歲。爲攻堅木、切救頭然、以名教相応。
- (14) 正しくは「大遼燕京西大鞍山延福寺蓮花峪更改通円通理旧庵爲觀音堂記并諸師实行録」、『図志』上一五〇～一五一頁、下一〇～一一頁。
- (15) 包世軒「遼《大鞍山蓮花峪延福寺觀音堂記》碑疏証―関于通円大師法蹟、通理大師恒索、通悟大師恒簡之記述」『北京遼金文物研究』一八四～一九一頁、原載『北京文博』一九九七―三。
- 三黄春和「遼《大鞍山蓮花峪延福寺觀音堂記》通理实行補考」同右書一九二～一九七頁、原載『北京文博』一九九八―三。
- (16) ……泊至康安二号、南宗時運。果有奇人、来昌大旨。遂以寂照大師・通円・通理此三上人、捷生問出、爲□中之龍象。伝仏心印、繼累代之高風、□無勝幢、作？不請文、俾相光迴照、然灯無味者、始自三師。…其根本、唯三上人。乃曹溪的嗣、法眼玄孫。爲此方宗派之原、伝心之首者矣。
- (17) 黄春和「遼燕京禪宗伝播史迹考述」『仏学研究』八

(一九九九年) 三三三—三三四頁。

(18) 道欽—太原人、道潜—河中府人、玄則—滑州衛南人、智筠—河中府人、泰欽—魏府人、策真—曹州人。

(19) 評曰、：而雲門・臨濟・法眼三家之徒、於今尤盛。鴻仰已熄、而曹洞者僅存。

(20) 長文なので、原文の掲載は省略する。なお、釈読にあたっては、大谷大学での石刻研究会（桂華淳祥教授主宰）の成果に負うところがある。

(21) 『百部叢書集成』之十七『禪乘』二、『家世旧聞』卷上（一三b—一四a）

北虜崇釈氏、故僧寺猥多、一寺千僧者、比比皆是。楚公（陸佃）出使時道中京。耶律成等邀至大鎮国天慶寺燒香。因設素饌、公問成、亦有禪僧乎。曰有之。頃有寂照大師、深通理性、今亡矣。

実はこの文は通行の『禪乘』本にはなく、『百部叢書集成』が補った旧鈔本二卷足本にのみ見えるものである。古松前掲論文注七三に引用するが、これが旧鈔本に拠るものであることの注記はない。

(22) 大安間、有感禪師者、自東徂西、屈於是院、喜其清幽而駐錫焉。：道宗聞其名、召至禁中、延訪移晷。仍賜紫方袍、加号寂照大師（欽定日下旧聞考）卷一一七、『金文最』卷八十三。古松前掲論文注四三参照。

(23) 恒簡と故山主弘曠の行実は、摩滅の甚だしい碑陰に

あつて、特に判読がむずかしい。やはり、大谷大学での研究会の成果（王明奕氏担当）に負うところが大きい。なお、研究会で取り上げた碑刻の録文は、いづれ公刊の予定である。

永泰寺内殿懺悔主・檢校太師・行鴻臚卿・通悟大師者。師諱恒簡、姓高氏、薊州玉田縣三女河人也。：及長、志慕出家。遂礼燕京永泰寺疏主臻公為師、与通理同門尔。受具之後、宗習識論、□（倦？）於学肆、尋於山水。後造通理之室、因論□子之義、□下亡□、深入道奥。：中京檀信□奇師解行、堅請下山、入京開化。学徒聞風齊至、日不滅七千之数。：主上聞風、宣請而至。：請為内殿懺悔主、特賜紫袍、加檢校太師、通悟之号。自尔已後、弥加欽重。因是燕京開化之後、杖錫名山、特来□比參拜老人之菴。：自棄講学、歴諸叢会、訪尋古迹、志在林泉。□聞大安山蓮花深谷景靜：即知是通円通理旧隱道場、群賢養道之所、杖錫尋訪、特来斯地（下略）。

(24) 「懺悔正慧大師遺行塔記」『北図』四五—一七六、『全遼文』卷十一、『図志』上二八—二九頁、下八五頁。

(25) 「崇昱大師墳塔記」『全遼文』卷十一、『北図』四五一—四五。

(26) 野上俊静『遼金の仏教』（平楽寺書店、一九五三年）二九六頁。

(27) 長谷部好一（幽蹊）「洞門の動向とその系譜—美

- 菴楮下について」(『印度学仏教学研究』一八一—一九六九年)、石井修道「鹿門自覚派の変遷——北伝曹洞宗——」(『宋代禅宗史の研究』(大東出版社、一九八七年)二八〇—二九四頁)。
- (28) 後有禅師希辯、宋之青州天寧之長老也。耶律將軍破青州、以師歸燕。初置之中都奉恩寺。華嚴大衆、請師住持、服其戒行高古、以為潭柘再來。
- (29) 至金天會間、退居太湖山臥雲菴、既而隱於仰山棲隱寺。驃騎高居安以城北園併寺前沙井、歸之常住。天眷三年、召師復住持。皇統初、更賜寺名為大方壽。師再隱仰山、門人德殷統灯於万寿。三年而退居於医巫閭。又有省端上人繼之、一如師存之日。
- (30) 『元一統志』卷一、棲隱禅寺在翠屏。在仰山。有梁開平四年鑄鐘記。碑云、幽州幽都眞仰山院。
- (31) 又按寺記、金天會戊申(六年)青州禅師受德眞通辯大師之請、住持此山、叢席大備、禅道興隆。
- (32) 世宗大定壬午歲(二年)太師尚書令南陽郡王請於朝、賜名棲隱。
- (33) 金国大定二十年正月勅建仰山棲隱禅寺今大都西山。命玄眞顯公開山、賜田設會、度僧万人。
- (34) 希辯師、本江西洪州黃氏、族系甚大、且多文人、有聞於世者。始參雲門・臨濟、得法於鹿門覺公、至沂州、礼芙蓉和尚印証授記、後住青社天寧。城破乃北來。人稱之為青州和尚。天德初示化於仰山。記乃金翰林學士・中靖大夫・知制誥施宜生所撰。其文略云、潭柘老人二百年後、放大光明。芙蓉家風、却來北方。薰蒸宇宙、豈其大事。因緣殊勝、亦有數耶。教有廢興、道無廢興。人有通塞、性無通塞。師既來燕、潭柘寂然。師既往燕、曹溪沛然。人知寂然、而不知潭柘未嘗去也。人知沛然、而不知青州未嘗來也。若然則無碑亦無害、有碑亦無礙。遂為之說。貞元元年十月記。
- (35) 『仏祖正宗道影』四卷の現行本は、康熙十五年原序、光緒六年重刊であるが、もとは明洪武年間に好道者が華梵諸祖の道影を画いたものに基き、崇禎十一年増補刻印した(原序)。したがって、各伝の史料源は灯史類と異にしたらしく、希辯の俗姓黃氏であること、奉恩寺にいたことなど灯史類には見えない。
- (36) 石井修道前掲書二八六頁。
- (37) 包世軒「門頭溝区伽藍名僧記」(蘇天鈞主編『北京考古集成』第一卷、北京出版社、二〇〇〇年)六四九頁(原載『北京文物与考古』四、一九九四年。この論文コピーを井黒忍君から頂いた。記して謝意を表す。なお、『図志』上一一六頁に「仰山棲隱寺遺址内残碑額」の図版を掲げる。残念ながら文字は見えない。
- (38) 少林英禅師為余言。昔青州辨公初開堂仰山。自山下十五里、負米以給大衆。其後得知医者新公、度為僧、俾主藥局。仍不許出子錢致贏余、恐以利心而妨道業。

新歿、繼以其子能。二十年間、齋厨仰給、而病者亦安之。故百年以來、諸禪刹之有藥局、自青州始。

(39) 『北圖』四六一一七、一九九〇年中華書局本『金文最』

卷一一。後者は石刻拓本によつて欠字三百六十余字を補う。

(40) 中華書局本『金文最』は「覺体」を「覺礼」とする。『北

図』では「覺」は見えるが、下の一字は欠けていて全く分からない。ただ「覺体」は仏教語で「さとりの本体」を意味するのに対して、「覺礼」は格別の意味はないので、従来の「覺体」でよいようである。

(41) ○人山善恒

『從容錄』卷一第二則

近代磁州衣法付人山。山曰、某甲不是怎麼人。州曰、不是怎麼人、不殃及伊。山以法乳情深、俛仰而受。州復曰、汝既如是、第一不得容易出世。若躁進輕脫、中間必有轆軻。

『五灯会元統略』卷一

仁山恒禪師、久侍大明、遂升堂奧。明付以衣法。師曰(以下右と略同)。

○王山覺体

『請益錄』卷上第三十則

昔「王山法祖侍磁州大明、勦力十年、躬為侍者。秘重深嚴、不見參学。一旦抽單、罔不疑怪。或問大明、侍者何往。明日、諸方來諸方去。何介意哉。：

一衆方疑、或蒙印許。其後久隱西山。太原府府運兩衙、請住王山、創建禪席」。皆号開堂出世也。『五灯会元統略』卷一、括弧内と略同。

『請益錄』卷下第五十九則

王山法祖云、獅子有三種。第一超宗異目、第二青肩共躡、第三影響不真。：羊質虎皮。『五灯会元統略』卷一、右文と全同。

(42)

先師与勝默師伯、二十余歲(脱字?)叢林敬畏。鄭州宝和尚、名震河洛。先師遍參往見。州云、兄弟年後、正宜叩參。老僧当年念念、常以佛法為事。先師避席、進曰、和尚而今如何也。州云、如生冤家相似。先師曰、若不得此語、幾乎枉行千里。州下禪床、握先師手曰、作家那。遂留數日。夾山謂仏曰、死灰裏一粒豆爆。蓋謂此也。

『五灯会元統略』卷一、

初參普照室。照曰(以下同)、「遂留數日」なし。「夾山」以下は割注「報恩秀曰、死灰裏一粒豈爆」とし、「蓋謂此也」なし。

(43)

雪巖先師、事勝默師伯、跪受呵斥。或問其故。曰、今諸方或有師資法屬、諍訟招譏、獅子身中虫、自食肉也。

(44)

永井政之「万松行秀の伝記をめぐる諸問題」資料、洪濟寺・舍利塔」「飯田利行博士古稀記念東洋学論叢」一九八一年)四八五〜五〇八頁。

(45) 石井修道前掲書二八八～二九一頁、資料十六一五三六～五三八頁。

(46) 明河曰、此伝取諸塔石。石文乃金永定節使楊邦基謬。謂、仏果自西蜀来汴、以心印伝仏日、仏日伝広慧、爲南岳下十七世。

なお、明河は仏日が妙喜宗果か否か、後考に俟つとしてゐる。

(47) 近代老青州、潭柘開山性和尚、韓相国防・施学士直生曰、二老若非事仏出家、皆王霸之器。

(48) 慈明与瑯琊覺、皆法兄弟、其(共)扶臨濟一枝。慈明而下十余世、得玄冥顛禪師。瑯琊而下亦十余世、得虚明亨禪師。玄冥風岸孤峻、無所許可、寧絶嗣而不伝。虚明急于接納。故子孫滿天下。又皆称其家、加(如)慈雲海、清涼相、羅漢汴、与法王昭公、皆是也。屏山爲虚明作墓誌、以爲二公伝与不伝雖異、而其道並行而不相悖也(拠四部叢刊本)。

(49) 瑯琊慧覺—泐潭曉月—毘陵真—白水白—天寧党—慈明純—洞林(普照)宝—慶寿教亨
 なお、虚明教亨については、石井前掲書二九一、二九四頁参照。

(50) 仏日和尚關係史料

(イ) 仏日和尚道、山僧未来時、燕京人鼻不正、山僧特来扳正。万松道、仏日鼻孔落在燕京人手裏

〔從容録〕第九十四則。

(ロ) 夾山謂仏日、死灰裏一粒豆爆(〔從容録〕第七十二則)。

(ハ) 青州・仏覺兩派既行。仏日提一枝臨濟禪、託迹聖安、分寮入室。一日自搗鼓上堂、抑揚雲門・臨濟宗風、平分半衆、不辭而去。仏覺恬不介意(〔請益録〕第五十二則、『五灯会元統略』卷四、青州仏覺禪師伝は仏日堯禪師とする)。

(ニ) 仏日自江右至燕、寓大聖安。一夕与仏覺・晦堂夜話次、時師年方十二、座右侍立。日曰、山僧自南方来、拄杖頭不撓著一箇会仏法者。師又手進曰、自是和尚拄杖短。日大驚曰、可乞此子統臨濟一宗。師曰、雲門・臨濟、豈有二邪。日称賞不已(〔五灯会元統略〕卷四、円通善国師伝—出典未詳)。

(ホ) 近代仏日、北来慶寿顛公、至死無可意者、寧絶嗣無人(〔從容録〕第五十三則)。

(ヘ) 仏日禪師与衆茶座次、見猫来、袖中擲鵝鴿与之。猫接得便去。日云俊哉、不可也是假作虚用(〔從容録〕第九則)。ただし、この仏日禪師は仏日円明海雲禪師かもしれない。

(51) 雲門宗自宋迄元、代不乏人。如円通善、王山濟、俱

明眼宗哲、法席甚盛。但嗣法莫可考。豈深藏其德而不求著耶、抑末流聞見之不広也。闕所不知、冀有後獲。

(52) 『大定繼灯録』があつたらしく、〔從容録〕第九十四

則に咸平府大覺寺法慶禪師伝を全文引用する。しかし、この灯史は早くに佚したと思われ、他に記録はない。『補続高僧伝』卷二十法慶伝は『從容録』からの転引であろう。

(53) 金天会中、仏覺大師瓊公、晦堂大師俊公、自南応化而北、道誉日尊、学徒万指。

(54) 帝后出金錢数万、為宮繕費、成大法席。皇統初、賜名大延聖寺。大定三年、命晦師主其事、内府出重幣以賜焉。六年新堂成、崇五仞、広十筵、輪奐之美、為郡城冠。八月朔作大仏事、以落成之。七年二月、詔改寺之額為大聖安。

(55) 『函志』上六六〜七三頁。特に仏覺塔は七二頁、晦堂塔は六九頁に図版がある。

(56) 范軍「北京金代碑刻叙録」「北京遼金文物研究」二五八〜二六二頁、「重建大延聖寺記」は二五九〜二六〇頁。

(57) 万松昔在慶寿玄悟席下、一年入室兩度。經半年纔得告香入室云々。